

先住民とデジタル化する世界

目次

序章 デジタル先住民研究の見取り図

—— 平野智佳子 9

第Ⅰ部 差別への抵抗

第1章 路上からインターネット空間へ：

オアハカ先住民と「コモン」としてのストリートアート

—— 山越英嗣 33

第2章 先住民運動におけるソーシャルメディアの活用と感情の動員：

オーストラリア都市部のブラック・ライブズ・マター運動を事例に

—— 栗田梨津子 57

第3章 デジタル空間における文化・コミュニティとの再接続

—— 北原モコットウナシ 83

第Ⅱ部 環境をめぐる取り組み

第4章 聖なる鳥の価値：

インド北東部のダム建設反対運動におけるメディア・オブジェクトの生成と循環

—— 長岡慶 105

第5章 先住民と市民社会のハイパーリンク・ネットワークを可視化する：

アマゾニアにおける運河開発をめぐる論争へのデジタル・メソッドからのアプローチ

—— 神崎隼人 141

第6章 インターネットの外側で叫ぶ：西シベリア森林の石油開発と抵抗運動

—— 大石侑香 169

第Ⅲ部 文化継承

第7章 ソースコミュニティのプレゼンスを重視した
民族誌資料デジタルアーカイブの構築 ————— 伊藤敦規 189

第8章 オンライン空間に文化的規範を持ち込む：
日本在住の移民マオリによるオンライン勉強会 ————— 土井冬樹 215

第9章 言葉の重要性を復興する：
アメリカ先住民ナヴァホ保留地における言語学習とデジタルメディア ————— 渡辺浩平 237

第Ⅳ部 コミュニティ内でのやりとり

第10章 台湾原住民族の部落生活におけるSNSの活用：
コミュニティの構築の視点から ————— 尤驥 257

第11章 不確かな通信によるトラブル回避：
中央オーストラリアにおける先住民のプリペイド型携帯電話の活用から ————— 平野智佳子 283

第12章 ソーシャルメディアで変化した住民関係：
コスタリカの先住民居住区におけるゴシップに着目して ————— 額田有美 299

あとがき ————— 324
索引 ————— 326
執筆者紹介 ————— 330

序章 デジタル先住民研究の見取り図

平野 智佳子

1. 先住民×デジタル

世界各地の先住民社会でデジタル機器の普及がめざましい。現在では、都市だけでなく辺境と呼ばれる土地に暮らす先住民の日常生活でもデジタル活用が急速に拡大している。2000年代に情報通信技術（ICT）を利用できる者と利用できない者の間で生じる格差（デジタル・デバイド）が問題視されると、パソコンやインターネットの利用状況の改善が図られるようになった。この取り組みによって先住民のデジタル・リテラシーが強化され、かつて限定的に利用されていたデジタル機器やその技術は、多くの場所で先住民の文化や社会を維持するために欠くことのできないインフラとなった。これらの動きは2020年以降のコロナ禍での経験によってさらに加速している。

本書が着目するのは、こうした先住民をめぐるデジタル環境の変化である。その過程には、デジタル機器を活用した先住民の新たな挑戦とそれとともに生じる課題やリスクが浮かび上がる。それは先住民をめぐる現状を示す重要な側面であるが、オンラインとオフラインの相互作用によってもたらされる状況であるがゆえに、従来の対面型のフィールドワークに基づく調査だけではその検証が難しくなっている。そこで本書では、デジタル実践の検証を通して先住民社会のダイナミクスを読み解く「デジタル先住民研究」（Digital Indigenous Studies）を提言する。そこから得られる知見は先住民の文化、アイデンティティ、社会関係を理解する上で重要な要素となり、先住民研究、およびメディア研究の幅を広げることにも寄与するだろう。その研究の意義や特徴、今後の発展性を示すために、まずデジタル先住民研究の見取り図を広げることにしたい。

本書の目的は、世界各地の先住民のデジタル活用の事例を通して、先住民をめぐる現状を描き出すことである。対象とするのは、メキシコ、オーストラリア、日本、インド、ペルー、ロシア、アメリカ、ニュージーランド、台湾、コスタリカに暮らす先住民の人々である。本書では「先住民」を不变的・静的なものではなく可変的なものとして位置づける。デ・ラ・カデナとスターൻ [de la Cadena & Starn 2007] は、先住民を「である (being)」という固定化された状態ではなく、「なる (becoming)」ものとして捉えるべきだと主張している。かれらは、従来、先住民という切り口で論じられてこなかった人々をも俎上にのせ、議論を深めた。

日本においては窪田と野林 [2009] が、外部社会の抑圧に抵抗する集団が「先住民」として実体化してきたと指摘している。これらの議論では、先住民運動を先導してきた「顕在的先住民」のみならず、それ以外の地域で先住民の権利主張をはじめた「潜勢的先住民」も積極的に取り上げられている。さらに深山・丸山・木村 [2018] はこれらの先行研究を踏襲するかたちで、先住民という存在が個別の社会状況のなかで「立ち現れる」ものであると考え、その現れ方のダイナミズム、とくに2007年の「先住民族の権利に関する国連宣言」採択以降の先住民を取り巻く状況について論じている。

本書でも「先住民」を可変的なものとして位置づけ、その過程のダイナミズムに着目する。本書で取り上げる先住民はその多くが顕在的先住民で、先住民運動の活発なエリアに暮らす人々であるが、インドやロシアなど運動に厳しい制限のある地域に暮らす潜勢的先住民に位置づけられるような人々の実践も取り上げ、多様な切り口から先住民をめぐる現状に目を向けることに努めている。

2. デジタル化による先住民の躍動

先住民をめぐる現状を捉える上で、本書がもっとも注意を払って分析するのは、先住民のデジタル機器や関連するサービスの活用である。1980年代半ばに電子メールが登場し、1990年代半ばにはインターネットによるモノ情報

のデジタル化が加速した。2000年代に入るとSNSによるコミュニケーションの時代が到来し、2015年頃にはIoT (Internet of Things) によるモノのデジタル化が進み、AI（人工知能）がそのデータを活用するようになった。先住民社会においても地域によってスピードに差があるものの同様の動きがみられ、急激なデジタル技術の進展が先住民の暮らしに大きな影響を与えている。

こうしたデジタル化の流れに対する先住民の人々の対応は多様である。とりわけ目立つのは、先住民の人々がデジタル機器を活用しながら、異議申し立てをしたり、自分たちの文化遺産を継承したり、家族や友人など身近な人々との関係を維持、再生産したりする姿である。その取り組みのプロセスには「先住民になる」ことが鮮明に浮き上がってくる。

ところが、従来の先住民研究は、多くの場合、対面での関係を調査対象としており、デジタル機器を媒体とした実践についてほとんど議論してこなかった。その理由は第一に、デジタル実践があくまで一時的な「仮想世界」のものにすぎないと考えられてきたからである。デジタル人類学者のトム・ベルストーフによると、現代のテクノロジー論では、物理的なものが現実的であり、デジタルなものは非現実的であるという見方が分析の前提となる傾向にあった。これは多くの研究者らが物理的な世界（一般的に西洋以外の地域）における文化的差異に関心を持ち、その在り様を民族誌的な手法で解き明かすことに学問的な主軸を置いてきたことに付随する〔Boellstorff 2016〕。

第二に、情報インフラの整っていない伝統的生活圏で調査を行う先住民研究者らのあいだで、デジタル化の流れが都市化やグローバル化に比べて、それほど影響力のあるものと見なされていなかったからである。1990年代頃より先住民研究の多くが、都市化やグローバル化に「先住民になる」というプロセスを見出し、その変革期に関心を示した。その時期には、インターネットを用いた広範なネットワーク構築や情報発信と密に関連する動きも一部みられたが、1990年代の時点でインターネットが普及していたのは主に都市部であり、発展途上国の地方においてはインターネットへのアクセスは限られていた〔Postill 2006: 194〕。

しかし、情報インフラの整備が進み、伝統的生活圏においてもスマートフォンやタブレットが生活の必需品となりつつある現在、デジタル空間を非現実的

なものとしてもはや軽視することはできない。メディア人類学者のダニエル・ミラーは「デジタルはあらゆる物質文化と同様に、単なる回路基板ではなく、私たちを人間たらしめる構成要素になりつつある」と指摘する [Miller & Horst 2012: 4]。私たちの生きる生活世界のリアリティはオフラインとオンラインの複雑な絡み合いの中に存在し、両者はデジタル技術の進展にともないます密接なものとなっている。ベルストーフもまた、オンラインでの経験やアイデンティティがリアルな生活を補完し、拡張する役割を果たし、逆にデジタルの活動がリアルの関係を強化、再構築する手段となっていると強調する [Boellstorff 2016]。両者の指摘にあるように、デジタル空間とリアル空間が相互に影響しあうものであるならば、そこに生み出される人間の存在や社会関係を描き出すことは、デジタルとともに先住民の現代的生活を理解する上で重要な手がかりとなるだろう。これらの議論を踏まえて、本書ではデジタル、あるいはヴァーチャル、オンラインという用語をリアルと対立するものとして捉えず、物理的なものと現実的なもの、デジタルなものと非現実的なものが相互に絡み合う様相を捉えることを試みる。

こうした視点はデジタル化の進展にともなって一般的なものになりつつある。とくに2010年代以降、先住民のデジタル実践に着目する研究の蓄積は顕著である。例えば、先住民のソーシャルメディアの使用について研究するドゥアルテ [Duarte 2017] は、アメリカの先住民を対象に市民運動のためのインターネット・アクセスの可能性とその限界について考える著書『ネットワーク主権 (Network Sovereignty)』を出版している。2019年には先住民研究者のメンヒバルとチャコンが『先住民のインターフェース (Indigenous Interfaces)』 [Menjivar & Chacon 2019] を刊行し、中央アメリカとメキシコの先住民の先住民運動において、ソーシャルメディアがどのような役割を果たしたかについて考察している。さらに2021年にはカールソンとバーグラントが『先住民が立ち上がる (Indigenous peoples rise up)』 [Carlson & Berglund 2021] を出版し、北米、オーストラリア、ニュージーランド、北アフリカの事例からFacebook、X (旧Twitter)、YouTube、Vine、Snapchat、Instagram、TikTokなどのプラットフォームが、先住民のエンパワーメントやコミュニティの変革、社会運動を促進していると論じている。これらの研究の蓄積は、都市部や伝統的生活圏においてデジタル化の流れが先住民

研究において重点的に検討するべきトピックの一つとなりつつあることを示している。

ただし、先住民のデジタル実践に関する研究は英語圏を中心に展開しており、日本では先住民のデジタル活用に関して体系だった研究はほとんどなされてこなかった。^{*1} この点に問題意識を持った近藤祉秋は、2020年に国立民族学博物館・若手共同研究「先住民と情報化する社会の関わり」（2020年10月～2023年3月）を立ち上げた。この研究会の目的は、デジタル化・情報化が進行する現代社会の中で先住民の人々がどのように生活世界を構築しているかを明らかにすることであった〔近藤 2021: 24-25〕。

これらの研究活動の中で、近藤と平野〔2023〕は、先住民運動、文化遺産、日常実践という3つの観点から先住民のデジタル実践をめぐる研究を整理し、デジタル化が先住民に与える影響を考察した。そこに示されたのは、先住民が主流社会や非先住民から一方的に表象される存在なのではなく、先住民がみずから表象する存在に変化してきたということ、そして、かれらのデジタル実践が文化的な規範に埋め込まれているが、決して閉じられていないということである〔近藤・平野 2023: 32〕。先住民のデジタル実践は、現地の価値観や社会関係に根差すものでありながら、外部との連携や内破的な力の勃興によって常に新しく刷新され続けている。デジタル化する世界において、このアクターとしての先住民の台頭を理解することが肝要であると近藤らは強調する。

以上の点を踏まえて、本書では世界各地で進んでいるデジタル化という現象に着目しながら先住民をめぐる現代の諸相を解き明かす。自由度が高く、既存のルールに必ずしも縛られないデジタル空間は先住民の創意工夫をおおいに刺激するが、同時にヘイトスピーチやネガティブな言説が投稿されやすく、不合理な暴力を一方的に経験する場にもなる。その相反する効果が従来の固定化された「先住民」像に大きな揺さぶりをかけている。こうしたデジタル空間で展開される先住民の変革やそれに付随して生じる困難を探究することで、デジタル先住民研究の可能性を示し、先住民理解をさらに深めることが本書の目的である。

3. デジタル空間を探究する

デジタル空間を通して先住民世界のダイナミズムを捉えるにあたって、本書がとりわけ着目するのは、デジタル技術や機器、サービスの利用によって生み出される4つの動き、すなわち①差別への抵抗、②環境をめぐる取り組み、③文化継承、④コミュニティ内でのやりとり、である。近藤と平野〔2023〕によるレビューでは、先住民のデジタル実践に関する研究の中で蓄積の多い順に先住民運動、文化遺産、日常実践という3つの項目に分類したが、本書では先住民運動の項目をさらに「差別への抵抗」と「環境をめぐる取り組み」に分けた。それは、当該分野において先住民運動に関する議論がとりわけ厚みを持ち、かつ本書の各章の内容にも同様の傾向が見られたためである。先住民運動は生活世界からやや距離のある実践という印象を与えがちだが、インターネット上で展開される先住民運動はデジタル機器や関連サービスとの親和性が高く、それらが身近なツールになっている。したがって、先住民運動が今日では日常生活に近い場面で行われていることを示す意味でも、これら4つの動きを順番に並べ、各部の柱とすることにした。以下、本書でこの4点に着目する理由を先住民の歴史に照らして示したい。

1点目の「差別への抵抗」に着目するのは、偏見や差別に対して先住民が異議を申し立て、植民地主義の負の影響を是正しようとする動きがインターネット上で活発化しているからである。先住民は植民地支配のもと抑圧され、差別されてきた歴史を持つ。こうした抑圧や差別に対する抵抗や運動が1970年代に活発化した。以降、先住民の権利回復に向けた取り組みが進み、多くの場合、先住民に対するあからさまな差別は是正されるようになった。だが、国家権力や主流メディア、入植者の言説によって植え付けられた先住民に対する侮蔑的な人種的ステレオタイプは、個々もしくは集団内のトラウマ経験を想起させ、先住民に精神的なショックや痛みを与え続けている。

こうした問題に対して、ソーシャルメディアを使った運動が1990年代後半頃より注目を集めている〔Niezen 2005: 534〕。カナダ先住民によるIdle No More運動はその代表的な事例である。2012年、カナダ政府の環境保全政策に対して、

4名の女性たち（3名がカナダ先住民）が異議申し立てを行った。同年11月、彼女たちはX（旧Twitter）で#IdleNoMoreのハッシュタグをつくり、情報発信を行った。その後、Facebookのファンページやホームページが作成され、運動はカナダ全土に広がり、先住民やその支援者たちが各地で活動を展開した〔Wilson & Zheng 2021: 19; 近藤・平野 2023: 6〕。ソーシャルメディアが長く抑圧されてきた先住民の「声」を発信し、情報戦の様相を呈していることは、山越論考（第1章）のメキシコのストリートアーティストたちによる先住民運動の事例にも見て取れる。

近年ではアフリカ系アメリカ人によるブラック・ライズ・マター（Black Lives Matter）運動も記憶に新しい。それは、2012年2月にアメリカのフロリダ州で起きた事件を発端に世界中へと広がった人種差別抗議運動である。この黒人に対する差別や不公正の問題は、オーストラリアでは先住民の拘留死や人種差別の問題と結びつき、#blaklivesmatterというソーシャルメディアキャンペーンとして独自の展開をみせた（「blak」が用いられることについては第2章注4参照）。栗田〔2022〕および栗田論考（第2章）によると、このキャンペーンは人種差別に晒される先住民や非白人住民の経験を広範囲に拡散し、似たような経験を持つ人々のあいだに怒りや悲しみの感情の渦を生み出したという。オーストラリアでは、2014年の#sosblakaustraliaキャンペーン（西オーストラリア州政府の対先住民政策に対する先住民の強い反発と抗議運動）や2023年の憲法に先住民の地位を明文化するかどうかを問う国民投票でも、ソーシャルメディアが先住民の連帯と変革を進める有効な手段となっている〔平野 2024〕。

他方、匿名性の高いインターネット上では、ヘイトスピーチや誹謗中傷、誤情報の流布など先住民に対する差別も増加している。北原論考（第3章）は、日本のアイヌの事例からインターネット上の誹謗や中傷が、植民地主義的暴力を思い起こさせ、先住民の人々に大きな精神的ショックと苦痛を与えるものだと論じる。これらのヘイトスピーチや憎悪投稿への方策について、X（旧Twitter）が反人種主義活動のコミュニケーション・ツールの一つとしてあげられる〔Elers, S., Elers, P. & Dutta 2021〕。ニュージーランドでは2019年3月15日、オーストラリアの白人至上主義者がクライストチャーチにある2つのモスクでイスラム教徒の礼拝者数十人を銃撃し、51人が死亡、多くの人が重傷を負った。こ

の悲劇が起きてから数週間にわたり、多くのニュージーランド人がヘイトスピーチ、人種差別、白人至上主義に対する批判をX（旧Twitter）で呟き、共有した。そこに示されたのは、SNSが積極的に活用される時代において人種差別や誹謗中傷をめぐる攻防はインターネット上で展開されるということである。

2点目の「環境をめぐる取り組み」に着目するのは、先住民、国家、企業の複雑な関係性がインターネット上に浮き彫りになるからである。土地やそこに生きるあらゆるものとの深いつながりを持つ先住民にとって、企業による資源開発と環境破壊の問題は深刻である。先住民のコンセンサスが十分に得られないままに進行する開発に、先住民の権利が侵害されているという批判もある。こうした開発事業に対する抗議運動では、画像や動画を含めたメディア（デジタル）・オブジェクトの活用が盛んである。例えば、アメリカ中西部の石油開発に反対するNoDAPL運動では、現地の水系に与える影響を懸念した先住民ラコタの人々が、神話に登場する黒蛇や、生命の聖性を象徴する先住民女性のイメージを、ソーシャルメディアを通して拡散し、その窮状を世界に訴えている〔Clark & Hinzo 2019〕。このような文化的意味合いの強いイメージがオンラインとオフラインを絶え間なく循環し、変革に向けて新たに価値づけされていく様子は、長岡論考（第4章）と山越論考（第1章）でも示される。

他方、メディア・オブジェクトが人間を動かすという側面もポストヒューマン論（「人間以後（の存在）」をめぐる議論）の中で指摘されている〔cf. 久保 2018〕。先住民運動の主戦場となっているインターネットは、メディア・オブジェクトによって構成されている。そして、これらのシステムを構築するのは、組織や企業、多様な背景を持つ個人である。神崎論考（第5章）がデジタル・メソッドを用いて明らかにするように、様々なアクターが絡み合う先住民運動の論争ネットワークは巨大で複雑であり、インターネット上に埋め込まれるハイパーリンクによって知らないうちに、ネットユーザーが特定の論争に辿り着くこともある。そこに立ち現れるのは、デジタル世界を飼いならしているはずの先住民が、デジタル世界に操作されるというもう一つの現実である。

インターネットの影響力の高さに懸念を示し、使用に厳しい制限をかけて情報統制を図ろうとする国家もある。政権にとって不都合な情報をアクセスおよび発信できないよう規制を行う戦争・紛争地帯や社会主義の国家においてそ

の傾向が顕著であるが、テロ防止や犯罪抑止という理由で先進民主主義国でもSNS規制が進んでいる。このような検閲や監視が行われる国では、現地に暮らす先住民の人々は特定の情報へのアクセスが難しく、家族や友人との連絡も遮断されることがある。ロシアの先住民を対象とする大石論考（第6章）は、先住民の土地や資源に影響を与える開発に対してインターネットを駆使して抗議運動を展開するのは環境保護団体など国外の組織であり、先住民は対面の会議の場で個人の要望を訴えるという現状を照らし出す。

3点目の「文化継承」に着目する理由は、インターネットを利用した文化遺産の記録と管理が盛んになっているからである。先住民は、植民地支配や戦争、同化政策など様々な過酷な経験の中で土地や景観、モノ、言語、口承伝承、儀式や信仰など生活を構成するありとあらゆるものを奪われてきた。これらの多くはいったん継承が途切れてしまうと再接続が難しく、沈滞する危機に瀕している。このような状況に対して、1990年代以降、文化遺産の歴史的、社会的な背景が見直され、先住民による返還や復興の動きが活発化している。とりわけ、デジタルメディアやソフトウェアの発展にともない、インターネット上の文化遺産マネジメントが幅広く展開するようになった。

組織が行う文化継承の取り組みとしては博物館のアーカイブ構築プロジェクトがよく知られている。ここで重要視されるのは、ただモノを返還するのではなく、文化的知識を個人あるいはコミュニティが利用できる状態にすることである。その過程では、先住民データ主権や情報格差、文化的知識の所有権をめぐる集団内部の競合や不適切なアクセスへの不安もつきまとう。これらの問題を解消するために先住民社会とのパートナーシップや協働が不可欠になっている [e.g. Archambault 2011; Duggan 2011; Hays-Gilpin & Lomatewama 2013; Schott & Quinones 2021; Wali 2015]。伊藤論考（第7章）が扱うのは、こうした協働を可視化させるプロジェクトである。

また、北米先住民、マオリ、サーミなどの間では、デジタル技術を使って先住民言語や文化の復興を目指す動きもみられている。例えば、カナダ・ユーロン準州ではタギッシュ語の話者と若者たちからなるチームがタギッシュ語に関するウェブサイトを作成するプロジェクトがあげられる [Moore & Hennessy 2006; 近藤・平野 2023]。タギッシュ語はアサバスカ諸語に属する先住民言語で、消滅の

危機にさらされている。この言語は從来、紙や対面でのやりとりによって記録・教育・管理されてきたが、デジタル技術を駆使することで外部の機関に委託せずにコミュニティ主体で先住民言語に関する知識を管理するようになった。このような取り組みは教育機関においても推進されており、先住民との連携を基本軸にして先住民独自の言語・文化による教育プログラムを受ける環境が整えられている。アメリカ先住民ナヴァホの言語復興の事例を扱う渡辺論考（第9章）では、その内実が示される。

一方、組織によるプロジェクトとは異なるレベルで、個人や小規模な集団によってはじめられるバーナキュラーな文化継承も目立っている。これらの取り組みは、ソーシャルメディアの無料サービスを活用すれば資本や人手を得る必要がないため気軽に始めやすい。その代わりに参加への強制力がなく、基本的には個々人の意志に委ねられる。これらの草の根的な集まりでは、自分たちの文化や言語について語られることが多いため、互いに顔見知りであることが重視される。日常的に文化を記録・管理する場面では、クローズドな空間をつくることができるFacebookやZoomなどのメンバーシップ機能のあるデジタルメディア・サービスが好んで活用されていることは土井論考（第8章）や尤論考（第10章）で論じられる。

4点目の「コミュニティ内のやりとり」に着目するのは、活動家やリーダー層ではない先住民の人々の間でもデジタル機器やソーシャルメディアが盛んに利用されるようになったからである。この動きは、2010年代半ばからの急激なデジタル革新、そして新型コロナウイルス感染症の流行によってさらに加速している。

現在では、スマートフォンを常時身につけるようになった人々が、ソーシャルメディアや各種のアプリを利用してやりとりを行う場面が一般的になっている。とりわけインターネット上で人ととのコミュニケーションを促すシステムであるSNSは、第三者にやりとりをみられる心配がなく、インターネット回線さえあれば通話もメッセージ送信も無料で行えるため、新しい連絡手段として瞬く間に広まり、先住民の社会関係に大きな変容をもたらしている。尤論考（第10章）にみられるように、デジタル機器は遠方にいる家族や知人と連絡をとりあうツールとして活用され、伝統的なコミュニティの再生を促している。

また、辺境の土地に暮らす人々にとって、デジタル機器は情報伝達機器であると同時に重要な緊急対応の手段でもある。近藤は、アラスカのディチナックの事例から、アラスカ先住民が狩猟に出かける際に携帯端末を活用している姿を描き、緊急時の先住民の情報伝達のあり方を論じている〔近藤 2021〕。こうした携帯電話によるコミュニケーションの取り方は多岐にわたっており、平野論考（第11章）では、オーストラリアの辺境のコミュニティに暮らす先住民が、遠く離れた家族にだけでなく、すぐそばにいる人にも親愛を確認したり、単に自分の存在をアピールしたりするために頻繁に通話を重ねる様子が描かれている。

他方、コミュニティにおけるデジタル機器の普及が、先住民の文化的規範に大きな揺さぶりをかけてもいる。アルゼンチンのブエノスアイレス周辺のコミュニティに暮らすグアラニの人々の間では、2014年に無料のWi-Fi接続を得るようになってから、デジタル機器が普及し、友人間の交流が盛んになったが、コミュニティの中心部でのおしゃべりが減ったという〔Wagner & Fernandez-Ardevol 2020〕。このことに、対面性を重んじる年長者たちが懸念を示し、デジタル機器の使用に制限を設けることがあったとワグナーらは指摘している。また、額田論考（第12章）が示すように、匿名性が高く、顔を出さなくても利用可能なソーシャルメディアでは過激なゴシップが飛び交い、オンラインでの先住民同士の衝突や軋轢に結びつくこともある。自由度が高く、規制や管理の難しいメディア・プラットフォームの存在が先住民にとって新たな脅威となっている点には十分な注意を払わねばならない。

4. 各章の内容

以上、4つの動きを柱にして本書は展開される。構成はこの序章に加えて、4部12章である。執筆者はみな文化人類学者であるが、デジタル・ネイティブ世代の研究者や博物館でプロジェクトを自ら推進してきた者、先住民当事者として研究に取り組む者など、異なる立場の執筆者がそれぞれのフィールドのデジタル活用を丹念に描こうとしている。読みやすさと全体のバランスを重

視して上述した4つの主題に区分けしているが、各章には部をまたいで共通する論点が含まれているため、いずれの章から読みはじめても本書の趣旨は十分に伝わると思われる。

第Ⅰ部「差別への抵抗」では、現在、インターネット上で活発に展開されている抗議運動など、差別に対する先住民の抵抗を扱う。

第1章は山越による「路上からインターネット空間へ：オアハカ先住民と「コモン」としてのストリートアート」である。山越論考は、メキシコ・オアハカ市での先住民のストリートアーティストたちがインターネット上で展開する運動について論じる。ここで示されるのは、運動に参加するアーティストたちが、自分たちの作品を個人の著作権で保護されるべき知的財産として捉えるのではなく、オアハカの先住民村落で伝統的に用いられてきた「共有」の思想をもとに「コモン」としての性質を付与し、自らの「声」を遠く離れた地域に住む人々に対して発信するものとして捉えている点である。第2章の栗田は「先住民運動におけるソーシャルメディアの活用と感情の動員：オーストラリア都市部のブラック・ライブズ・マター運動を事例に」において、南オーストラリア州の都市先住民を中心に行開されたブラック・ライブズ・マター運動でソーシャルメディアが果たした役割を考察する。そこで明らかにされるのは、ソーシャルメディアには先住民の感情を共有し、連帯を強める効果がある一方で人々の記憶に留まりにくいという特徴もある点、そして、二分法的な思考が顕著にあらわれるソーシャルメディアの活用には、先住民と白人、もしくは先住民内部の分断を深めるリスクがあるという点である。第3章の北原による「デジタル空間における文化・コミュニティとの再接続」は、つながりを喪失した人々がソーシャルメディアなどデジタル空間での発信を通じて自文化やコミュニティとの再接続を果たしていることを示す。他方、インターネットは自由度が高いため、誤情報があとを絶たず、ヘイトスピーチや中傷など、アイヌ民族に対する攻撃も起こりやすい。北原は、こうしたインターネット上で拡散される投稿がアイヌ民族の尊厳が損なわれる環境を生み出していることに警鐘を鳴らし、個人や私企業の範囲に留まらない、政治による対応の必要性を訴えている。

第Ⅱ部「環境をめぐる取り組み」では、主に開発による環境汚染に対峙する先住民のデジタル活用に着目し、インターネット上で循環するメディア・オブ

ジェクトや論争ネットワークの様相、あるいは先住民運動におけるインターネットの不在を検証する。

第4章の長岡による「聖なる鳥の価値：インド北東部のダム建設反対運動におけるメディア・オブジェクトの生成と循環」は、モンパ僧によるダム反対運動におけるメディア・オブジェクトの流通と価値の流動性を描く。この環境運動では、日常における現地住民とオグロヅルの関わりの薄さとは対照的に、インターネット上ではオグロヅルが環境主義的な言説と結びつき、オグロヅルを守るための運動としてのイメージが拡散されていく。長岡論考は、このズレが人間と機械との絶え間ない絡まりあいの過程で生じていることを示す。第5章の神崎による「先住民と市民社会のハイパーリンク・ネットワークを可視化する：アマゾニアにおける運河開発をめぐる論争へのデジタル・メソッドからのアプローチ」は、ペルーにおける「アマゾン運河プロジェクト」に着目する。神崎は、ソフトウェアの「Hyphe」を用いたデジタル・メソッドによってインターネット上に残される論争のネットワークをたどる。そこで明らかにされるのは、先住民組織と環境保護団体の間の同盟関係とダイナミズムが、ハイパーリンクという技術的な側面に多大な影響を受けていること、すなわち、先住民組織にとってインターネット上の論争の行方はハブとなっている先住民問題NGO系グループの手に委ねられているという点である。これに対して、第6章の大石による「インターネットの外側で叫ぶ：西シベリア森林の石油開発と抵抗運動」が描き出すのは、インターネットが多用される先住民運動とは対照的なインターネット不在の世界である。シベリアでは、環境問題系NGOによるインターネットを駆使した環境運動が活発であるのに対して、現地に暮らす人々は政府に対して個々人で陳情を行うだけで、インターネット上の環境運動にはほとんど関与しない。こうした先住民の対応から、先住民運動の手段として一般的になっていいるインターネットが、制限・管理の厳しい社会主义国家においては今も重要な役割を担っていない可能性が示される。

第III部「文化継承」では、デジタルアーカイブやデータベースの構築、言語復興などの文化遺産の保護、継承を扱う。

第7章の伊藤は「ソースコミュニティのプレゼンスを重視した民族誌資料デジタルアーカイブの構築」において、国立民族学博物館が構築したデジタル

アーカイブの事例を扱う。このデジタルアーカイブには、博物館で資料熟覧を行った米国先住民ホピ民族の記憶や経験の「もの語り」が映像として収録されている。伊藤はこのデジタルアーカイブを、資料の来歴と物質的特徴を記述したテキストと画像を主なコンテンツとする従来型の資料目録とは異なる、ソースコミュニティの人々が次世代に見てもらいたい・残したいと感じるカルチュラル・センシティビティに配慮した民・学・博協働プロジェクトの成果として提示する。第7章が博物館事業としての文化遺産の継承を論じるのに対して、第8章の土井は「オンライン空間に文化的規範を持ち込む：日本在住の移民マオリによるオンライン勉強会」において、コロナ禍に開始されたマオリ語のオンライン勉強会という草の根的な文化継承のあり方を論じる。マオリの学習の現場ではオンライン学習による文化的規範の形成は難しいと考えられてきた。これに対して土井論考が示すのは、参加者の間にすでに親密な関係が築かれている場合、対面で生じる恥ずかしさが軽減されるなど、オンライン学習が有効な手立てとなりうる点である。他方、オンラインだとマオリ語を話す上で重視される儀礼的な手順を進めることが難しく、この点が移民マオリにとってオンライン学習の障壁となることも指摘される。第9章の渡辺による「言語の重要性を復興する：アメリカ先住民ナヴァホ保留地における言語学習とデジタルメディア」は、アメリカ先住民ナヴァホの言語復興の取り組みにおけるデジタルメディアの活用を考察する。現在、ナヴァホ保留地ではナヴァホ語話者が減り、日常的には英語が使用されることが多い。その背景には、アメリカ社会で生きる上では英語が重要であるという認識がある。そのため、ナヴァホ語復興のためには、ナヴァホ語の重要性を高めることが必要である。渡辺論考は、ナヴァホ保留地では、語学学習のオンラインプログラムやDVD、デジタル技術が、ナヴァホ語の重要性を高めるために用いられていると論じる。

第IV部「コミュニティ内のやりとり」では日常生活におけるデジタル機器やSNSの活用を扱う。

第10章の尤による「台湾原住民族の部落生活におけるSNSの活用：コミュニティの構築の視点から」は、台湾原住民族ルカイの「部落」での人間関係の維持、伝統文化の伝承、およびアイデンティティの形成にSNSが果たす役割を描く。ルカイでは就労・就学を理由に平地、都市へ転出する者が増えて、

連帯意識を維持することが難しくなっている。これに対して、尤論考が示すのは、グループLINEやFacebookのライブ配信などSNSの活用が、遠隔地にいる人々との間にも情動の結びつきを生み、部落のメンバーとしてのアイデンティティを強化していく過程である。第11章の平野による「不確かな通信によるトラブル回避：中央オーストラリアにおける先住民のプリペイド型携帯電話の活用から」は、辺境の先住民コミュニティに暮らす人々の日常的デジタル実践を読み解く。かれらは携帯電話を貸し借りして遠方の家族との関係構築を図る一方、他者による携帯電話の使い過ぎや盗難などの損害や負担を最小限にとどめるため、通信料に上限のあるプリペイド型をあえて選択している。ここに示されるのは、通信に不確かさを残すことでトラブルを避け、「分かち合い」や「世話の関係」を保とうとする先住民の創意工夫である。第12章の額田による「ソーシャルメディアで変化した住民関係：コスタリカの先住民居住区におけるゴシップに着目して」は、コスタリカの先住民プリブリの人々の間の分断や対立を、ソーシャルメディアで拡散されるゴシップに注目して読み解く。FacebookやWhatsAppなどのソーシャルメディアは極端な意見が表しやすいメカニズムを持つと同時に、そこで共有される情報は〈開放〉と〈同時性〉という特質を持つ。これらの特質がゴシップのリアリティを高め、オーラルの情報とのシームレスな混じり合いの中で、先住民同士の分断や対立を深めていると指摘する。

5. 「先住民になる」概念の発展に向けて

以上、本書が描き出すのは、オフラインとオンラインの交錯する時代において躍動する先住民のデジタル活用の実態である。それは個人から国家レベルのものまで実に多様で、それぞれのスケールも異なるため、現時点で互いの関係性を明示するのは難しい。だが、デジタル先住民研究を進めることで「先住民になる」概念をより発展させる可能性は十分にあると思われる。なぜなら、各章の事例には多かれ少なかれ、先住民の権利やアイデンティティが強化されるような変革の萌芽が見て取れるからである。

ここでは、今後の研究を見据えて「先住民になる」ことをめぐる従来の研究に「デジタルとともに先住民になる」(becoming Indigenous peoples with digital)という見方を追加することを提案したい。それは、インターネットやソーシャルメディアを伝統的生活圏や都市という「現実」の世界を浸食し、「先住民らしさ」を損なわせるものと考えるのではなく、人がデジタルと関わりをもとうとする過程で先住民性が生み出されると考える立場である。こうした立場は、デジタル技術が先住民としてのアイデンティティを共有するプラットフォームを生み出すなど、「先住民になる」ことをめぐる現状を浮かび上がらせ、オンラインの世界により大きな信憑性やアリティを前提とするロマンティックな言説に搖さぶりをかける。この立場をとることで、従来の「先住民になる」概念に当該分野において新規性のあるいくつかの視点をつけ加えることが可能だろう。以下の4点は各章で必ずしも明示されているわけではないが、その内容から浮き上がってくる視点である。

第一にオンラインとオンラインの世界が連続する生活世界において維持、再生産される「先住民」としてのアイデンティティについて考える視点である。これまでみてきたように、オンラインでのやりとりはオンラインの関係をより親密なものへと発展させてきた。一方で、オンラインでくすぐる程度であった対立が、オンラインでのやりとりを機に完全に炎上してしまうこともある。これらの事例から見て取れるのは、先住民世界を大きく揺さぶる連帶や分断が、人々がオンラインとオンラインを往来する中で生まれているということである。従来の研究では、伝統的生活圏や都市などオンラインで育まれる先住民の関係性のダイナミズムが中心的に論じられてきたが、先住民とデジタルのかかわり合いに着目することで、距離や属性をこえてますます複雑化する「先住民になる」ことの現状を捉えることが可能となる(第1章、第2章、第11章、第12章を参照)。

第二にインターネットが先住民の文化遺産を記録・管理する空間として活用されていることについて考える視点である。インターネットがクラウドに記憶を保持しつづけるので、先住民の人々は場所や時間をこえて自分たちの文化遺産にアクセス可能になった。このことはデジタル返還というかたちでコレクションの脱植民地化を進める一助となっている。しかし一方、ソーシャルメディアが気軽なものになっているため、本人たちが残したくない記録がインターネット

上に流出し、拡散されたりする問題も生じている。インターネット上の記録の権利をどう保障するかは重要な問題であるが、従来の「先住民になる」ことの議論ではこの点が十分に検討されていない。現在では、博物館との協働を通じたアーカイブ構築からソーシャルメディアを用いたグループや個人のやりとりまで、様々なかたちで記録・管理が行われている。この点を踏まえてデジタル活用の事例の検討を進めることで、先住民と非先住民が混じり合い、交渉する文化継承のあり方を読み解くことができるだろう（第3章、第7章、第8章、第9章、第10章を参照）。

第三に先住民と国家のあいだの新たな関係性を捉える視点である。2010年代半ばに訪れたデジタル大流通の時代、そして、2020年以降のコロナ禍を契機に加速したリモート対応やデジタル活用が、国家をこえた人々の連帯を生み、「先住民になる」動きをこれまでにないレベルで進めている。これは翻ると、デジタルの使用に権限を持つ国家が、先住民の変革を抑止する可能性を秘めているということである。例えば、中国など社会主義国が国民を統制し、公共領域と経済領域を管理するために、AIによるデジタル監視技術を利用してすることは近年、多くの文献で論じられている。また、民主主義国であっても巨大な民間IT企業のデータ収集システムと官民連携に支えられた事実上の監視システムが生まれているという見方もある〔Schacter 2024〕。ナショナリズム論においてはグローバル化の進展によって国民国家の弱体化が進んだという指摘もあるが、デジタル監視システムを持たない国家はきわめて少数であることから〔谷脇 2023〕、国家は先住民運動を制御する術を少なからず備えていると考えてよいだろう。このことは、国家レベルのインターネットの統制や情報管理、操作の検証が、オフラインでは顕在化しにくい先住民と国家のあいだの新たな統治の力学を読み解くきっかけとなることを示している（第4章、第6章を参照）。

第四にオンライン上でのアルゴリズムによる意思決定が先住民社会に与える影響について考える視点である。情報学者であるサフィヤ・ノーブルは、こうした意思決定を実行するための数学的定式化を行っているのは人間であると理解することを強調している。なぜなら、無害、中立的、あるいは客観的なものだと見なされる「ビッグデータ」や「アルゴリズム」といった言葉が、これらの決定を下す人々のあらゆる種類の価値観を有しているからである。つ

まりそれは、差別や人種主義がコンピューターコードにも組み込まれ、検索エンジンによって人々が特定の情報に方向づけられるということである〔ノーブル 2024: 20〕。このようなデジタルな意味づけは、先住民の人々を侮辱し、傷つける可能性があるにもかかわらず、先住民研究においてデジタルメディアを通じた情報フローに関する議論は十分に行われていない。インターネットやアルゴリズムに注意を向けることは、通常のフィールドワークでは掴みきれない、検索結果に埋め込まれた先住民への差別や偏見を捉えるための重要な足がかりになるだろう（第5章を参照）。

以上、「デジタルとともに先住民になる」という見方を導入することで可視化されるのは、デジタル化の進展する世界に暮らす先住民を取り巻く複雑な現状である。先住民の中には、デジタル機器をほとんど使用しない先住民もいる。だが、そういった人々も望むと望まざるとにかかわらず、世界的なデジタル化の流れの中にあり、その影響を否応なしに受けざるを得ない。このようなデジタル時代において、先住民世界の動態を捉えるために、デジタル先住民研究を進めることは不可欠である。

ただし、ここでの主張はオンラインの調査の重要性を否定するものではない。本書に収められた論考の多くが指摘するように、オンライン調査のみで明らかになることは限られている。本書を構成する各章は、何年にもわたってフィールドワークを重ね、現地住民との信頼関係を築いてきた研究者らによって執筆されている。こうした関係構築は、デジタル空間における匿名性の高い情報の収集や使用を進めるうえできわめて重要である。ソーシャルメディアへの投稿やデータベースで公開されている画像などを活用する際には著作権、肖像権について細心の注意を払う必要がある。こうした問題に対して、本書の執筆者たちはフィールドの人々の許諾を得た上でデータを使用し、必要に応じてモザイクを入れるなど倫理的配慮を行っている。さらに、メンバーシップ機能のあるメディア・プラットフォームに参加するにはメンバーの承認を得なくてはならない場合もあるが、執筆者の多くがその一員となり、日本に戻ってからもフィールドの人々と密なやりとりを行っている。すなわち、多くの場合、対面での良好な関係があってこそ、オンライン調査が成立しているのである。

もっとも、本書を通読した際に先住民の日常的なデジタル実践に関する記

述が少ないという印象を持たれる読者もいるかもしれない。本書の主な内容は、先住民社会から国内外の一般社会への政治的、社会的な主張や情報発信をめぐる考察である。本書が扱うトピックに幾分の偏りがあるとすれば、その理由は、インターネット上での主張や情報発信が現代先住民社会のデジタル活用において顕著であるのと、本書の論考の多くがコロナ禍中のフィールドワークがままならない時期に日本国内で検討されたものであるからである。ここで扱いきれなかった先住民の日常的なデジタル実践の事例に関しては、千里文化財団が刊行する『季刊民族学』189号（2024年7月発行）の特集「先住民のデジタル世界：ありふれた日常実践と、あらたなる挑戦」にて執筆者の多くが詳細を描いているため、ぜひ参考にもらいたい。

1990年代のIT革命に続き、2010年代にはソーシャルメディアの活用が急速に広まった。2020年には新型コロナウイルス感染症の感染拡大を契機に、デジタル機器やオンライン空間はさらに身近なものとなっている。一方、セキュリティの脅威や誤情報の拡散、ヘイトスピーチ、誹謗中傷などの要因が相まって、インターネットの使用に管理や制限が加えられるなど、その状況変化は目まぐるしい。本書で示すデジタル実践はごく一部のものだが、それもまた刻一刻と過去の事象になりつつある。ますます加速する情報通信の技術発展とそれに呼応するかたちで生成と消失を繰り返すデジタル空間の特性を踏まえた上で、先住民とデジタル化する世界を扱う本書が、先住民の新たな変革を捉えるための第一歩となることを期待している。

注

- * 1 例外的な先行例として人類学・民族誌学博物館におけるソースコミュニティの人々との協働資料カタログ制作に向けた国立民族学博物館のプロジェクトがある。やはり英語圏である北米の事例を検討しつつも、文部科学省の概算要求を得て、今を生きるソースコミュニティの人々の思考や存在感を中心に据えた資料データベース作りを体系的に試みてきた。たとえばその中心的な役割を担った伊藤敦規は2016年2月に日本文化人類学会が後援した国際学術集会（フォーラム型情報ミュージアムのシステム構築に向けて——オンライン協働環境作りのための理念と技術的側面の検討）での議論を国立民族学博物館のオンライン雑誌 *TRAJECTORIA* の創刊特集号にまとめている（Ito 2020）。全体的なプロジェクトのデザインを起こした伊藤は、自ら代表者となった試行版プロジェクトでの経験を踏まえ、資料情報を多言語化したりコメント投稿機能を備えれば自動的に情報が集まつてくるという楽観的な期待は避け、ソースコミュニティの人々が資料熟覧の際に残す多声的な見解という意味でのデジタル・ストーリーテリングをこれからの人類学博物館が大切に継承すべき「リアルな」資料を構成する一項目として位置づけた。
- * 2 先住民が自らに関連するデータにアクセスし、収集し、管理し、利用する権利のこと。詳細は第7章の伊藤論考で触れられる。
- * 3 宗主国によって土地を占領され、文化や価値観を強制されていた人々が、依然として残る植民地化の負の影響から脱することを意味する。

参照文献

和文献

- 久保明教 2018 『機械カニバリズム——人間なきあとの人類学へ』 講談社。
- 窪田幸子・野林厚志編 2009 『「先住民」とはだれか』 世界思想社。
- 栗田梨津子 2022 「ソーシャルメディアを活用した先住民運動の展開——カナダとオーストラリアの事例から」『人文学研究所報』68: 63-71。
- 公益財団法人千里文化財団 2024 『季刊民族学』189号（特集 先住民のデジタル世界——ありふれた日常実践と、あらたなる挑戦）千里文化財団。
- 近藤祉秋 2021 「端末持って、狩りに出よう——SNS時代の内陸アラスカ先住民」 藤野陽平・奈良雅

- 史・近藤祉秋編『モノとメディアの人類学』ナカニシヤ出版, pp. 233-245.
- 近藤祉秋・平野智佳子 2023 「先住民とデジタル化する社会——先住民研究の新しい枠組みに向けて」『国立民族学博物館研究報告』48(1): 1-44.
- 谷脇康彦 2023 『教養としてのインターネット論——世界の最先端を知る「10の論点」』日経BP.
- ノーブル, サフィヤ・U 2024 『抑圧のアルゴリズム』(大久保彩訳) 明石書店.
- 平野智佳子 2024 「オンライン空間で先住民の声をきく——博物館展示の脱植民地化に向けて」『文化人類学』89(1): 54-71.
- 深山直子・丸山淳子・木村真希子編 2018 『先住民からみる現代世界——わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』昭和堂.

洋文献

- Archambault, J. (2011). Native Communities, Museums and Collaboration. *Practicing Anthropology*, 33(2), 16-20.
- Boellstorff, T. (2016). For Whom the Ontology Turns: Theorizing the Digital Real. *Current Anthropology*, 57(4), 387-407.
- Carlson, B. & J. Berglund (Eds.). (2021). *Indigenous Peoples Rise Up: The Global Ascendancy of Social Media Activism*. New Brunswick: Rutgers University Press.
- Clark, L. S. & A. Hinzo (2019). Digital Survivance: Mediatization and the Sacred in the Tribal Digital Activism of the #NoDAPL Movement. *Journal of Religion, Media and Digital Culture*, 8(1), 76-104.
- de la Cadena, M. & O. Starn (2007). *Indigenous Experience Today*. London: Routledge.
- Duarte, M. E. (2017). *Network Sovereignty: Building the Internet across Indian Country*. University of Washington Press.
- Duggan, B. J. (2011). Introducing Partnered Collaboration into a Native American Gallery Project in a State Museum. *Practicing Anthropology*, 33(2), 28-34.
- Elers, S., P. Elers, & M. Dutta (2021). Responding to White Supremacy: An Analysis of Twitter Messages by Māori after the Christchurch Terrorist Attack. In B. Carlson & J. Berglund (Eds.), *Indigenous Peoples Rise Up: The Global Ascendancy of Social Media Activism*. New Brunswick: Rutgers University Press.
- Hays-Gilpin, K. A. & R. Lomatewama (2013). Curating Communities at the Museum of Northern Arizona. In R. Harrison, S. Byrne, & A. Clarke (Eds.), *Reassembling the Collection: Ethnographic Museums and Indigenous Agency* (pp. 259-284). School for Advanced Research Press.
- Ito, A. (2020) Introduction an Approach of the Info-Forum Museum: To Create a Source Community-driven Multivocal Museum Catalog. *TRAJECTORIA* 1, (https://trajectoria.minpaku.ac.jp/articles/2020/vol01/01_0.html), National Museum of Ethnology, JAPAN.
- Menjivar, J. G. & G. E. Chacon (2019). *Indigenous Interfaces: Spaces, Technology, and Social Networks in*

- Mexico and Central America*. University of Arizona Press.
- Miller, D. & H. A. Horst (2012). *Digital Anthropology*. London: Routledge.
- Moore, P. & K. Hennessy (2006). New Technologies and Contested Ideologies: The Tagish First Voices Project. *American Indian Quarterly*, 30, 119-137.
- Niezen, R. (2005). Digital Identity: The Construction of Virtual Selfhood in the Indigenous Peoples' Movement. *Comparative Studies in Society and History*, 47(3), 532-551.
- Postill, J. (2006). *Media and Nation Building: How the Iban Became Malaysian*. New York and Oxford: Berghahn Books.
- Schacter, R. (2024). Tocqueville and the Paradoxes of Digital Individualism. In K. Dharamsi (Ed.), *Liberal Education in an Age of Automation*. Wilmington, DE: Vernon Press.
- Schott, K. A. & R. Quinones (2021). Steps Towards Decolonizing a Museum: Sharing Diverse Voices. *Expedition*, 63(1), 58-59.
- Wagner, S. & M. Fernandez-Ardevol (2020). Decolonizing Mobile Media: Mobile Internet Appropriation in a Guarani Community. *Mobile Media and Communication*, 8(1), 83-103.
- Wali, A. (2015). Centering Culture in Museum Work/Centering the Museum in Culture Work. *Practicing Anthropology*, 37(3), 24-25.
- Wilson, A. & C. Zheng (2021). Shifting Social Media and the Idle No More Movement. In B. Carlson & J. Berglund (Eds.), *Indigenous Peoples Rise Up: The Global Ascendancy of Social Media Activism* (pp. 14-31). New Brunswick: Rutgers University Press.

索引

【あ行】

- アーカイブ……25, 50, 142, 144-145, 156
→デジタルアーカイブ
アイデンティティ……9, 12, 22-24, 70, 75, 77, 79, 83-84, 87, 89-92, 95, 234, 239, 241, 257, 259-260, 262-265, 275-276, 278, 285, 300, 307
アイヌ……15, 20, 83-102, 221
アクターネットワーク理論 (ANT) ……142-143
アサンプレア……41, 46, 52
アディバシ (Adivasi) ……106, 133
アナング (Anangu) ……286-290, 292-297
アボリジナル……57, 75-76, 79
アマゾン運河プロジェクト……21, 143-148, 151-162
アルゴリズム……4, 25-26, 111, 125, 131, 143
インターネット……4-5, 7-12, 14-18, 20-21, 24-27, 33-35, 38, 40, 42, 45-46, 48-53, 58-59, 91, 95-97, 99-101, 105, 107, 115-116, 125, 135-136, 141-144, 156, 162-163, 169-170, 175-176, 189, 234, 246-247, 261, 269, 277, 296-297, 304, 312
ヴァーチャル……12, 108
ウェブエンティティ (web entity) ……147-148, 151-155, 157, 159-160
エスノグラフィ……141-143

- 炎上……24, 114, 299
オアハカ……20, 35, 38-46, 48-50, 53
オグロヅル……21, 105-107, 111, 116-132, 135-136
オフライン……7, 9, 12, 16, 19, 23-26, 71, 78, 109-111, 127, 129-131, 143, 291, 295, 307, 309, 311, 314
オンライン・アクティビズム……57-59
オンライン空間……5, 7, 22, 27, 69, 78, 169-170, 175, 183, 215-216, 222, 230-233, 263, 265, 276-277, 284, 301, 307

【か行】
カウパパ・マオリ (Kaupapa Māori) ……217-219, 221, 234
カウンターパブリック (対抗的公共圏) ……108
囲い込み……49, 51
カパハカ (kapa haka) ……215-216, 218, 227, 229
カルチュラル・センシティビティ……22, 193, 209, 211
環境運動……21, 105, 121, 123-125, 128, 132
関係論……284-285
監視……17, 25, 49, 100, 111, 182
感情の動員……20, 59
危機言語……99, 244
協働……17, 22, 25, 28, 130, 142, 189-191, 195, 203, 206, 210-211
キリスト教 ……250, 258, 267-269, 274, 276
クカマ=クカミリア (クカマ) ……146, 161
クラン……196, 308, 311, 318-320
グリーンピース・ロシア……173-175, 177, 180, 182-183

言語復興……18, 21-22, 217, 237-239,
242, 245-246, 249-250
コード・トーカー……243
ゴシップ……19, 23, 309-311, 313-314,
321
コスタリカ……10, 23, 299-300, 302, 307-
308, 312, 315-318, 320-321
コモン……20, 34-35, 38, 51

【さ行】

再接続……17, 20, 101, 191
サバティスタ民族解放軍 (EZLN) ……33,
35
差別……14-16, 20, 26, 60-61, 63-68, 71-
73, 75-77, 83, 87, 90-93, 95, 97, 100,
106, 108, 320
シェアリング……286-288, 293-295, 297
自己決定権……258
実践としてのコミュニティ……263-265,
275-277
指定トライブ (Scheduled Tribe, ST)
……106, 133
シピボ=コニボ……161
市民社会……21, 33, 52, 141-144, 156,
159, 163
社会主義……16, 21, 25, 175
宗教……88, 106, 108, 121-123, 177, 193,
209, 247
肖像権……26
情報格差……17, 260, 288, 297 →デジタ
ル・デバイド
植民地主義……14-15, 58, 94, 96-97, 132,
189, 297
所有権……17, 85, 304
資料熟覧……22, 28, 190-191, 194-195,
199, 202-203, 206

新型コロナウイルス感染症……18, 27,
215-216, 220-223, 228, 230, 232, 234,
289, 320
真正性……88, 94, 97
スティグマ……87, 89, 269
ストリートアート……20, 35, 39-42, 44-45,
50, 52
スマートフォン……4, 6-7, 11, 18, 107, 260-
262, 268, 270, 272, 276, 278, 297, 301,
304, 306-307, 312-314, 317
先住民居住区……23, 300-302, 307, 315-
317, 319, 321
先住民研究……9, 11-13, 23, 26, 35, 262
先住民データ主権……17
先住民になる……11, 23-26, 141, 234,
259, 263, 265, 275, 277, 285, 296, 300,
307, 315
先住民族の権利に関する国連宣言……10
先住民法……300
争点 (issue) ……141-142, 144-145,
147-148, 152, 154, 156-163
ソースコミュニティ……21-22, 28, 189-
192, 194-195, 198, 202-203, 206, 209-
211

【た行】

台湾原住民族……22, 257-263, 265, 274-
278
脱植民地化……24, 63
チベット仏教……111-112, 119, 121-122,
135
中央集権……169, 171
著作権……20, 26, 46, 49, 51
デジタルアーカイブ (DA) ……189-190,
193-195, 197-199, 201, 203, 206, 209-
212, 277

- デジタル・エスノグラフィ……59
 デジタル先住民研究……9, 13, 23, 26, 315
 デジタル・デバイド……9, 288
 デジタル・ネイティブ……19, 296
 デジタル・メソッド (DM) ……16, 21, 142-143, 147, 162-163
 デジタル・リテラシー……9
 同化政策……17, 216, 317
 都市化……11
 トラウマ……14, 89, 95
 トラブル回避……23
 トランスコーディング……110-111, 134
- 【な行】**
 ナヴァホ……18, 22, 237-251
 ナショナリズム……25, 264
 ネットワーク……5, 7, 11-12, 16, 21, 34-35, 58-59, 71, 77, 79, 108, 117-118, 120, 122, 124-125, 133, 141-142, 145-148, 151-152, 154-159, 162-163, 176, 197, 296
 ネネット……169-172, 180, 184
- 【は行】**
 ハイパーリンク……7, 16, 21, 142, 146-148, 151, 153, 155-158, 162
 ハッシュタグ……8, 15, 66, 108, 134
 ハブ……21, 154, 156-157, 159-160, 162
 汎原住民意識……259
 ハンティ……169-174, 176, 178-179, 181, 184
 被差別→差別
 非暴力……135
 フアナウンガタンガ (whanaungatanga) ……217-220, 223, 230, 232
 フィールドワーク……9, 26-27, 35, 105, 143, 191, 285
 フェイクニュース……299, 320
 部落主義……259, 266, 274
 ブラック・ライブズ・マター (Black Lives Matter, BLM) ……15, 20, 59-63, 65, 67-78, 134
 プリブリ……23, 300, 302, 306-307, 311, 317-320
 プリペイド型携帯電話……23, 283-285, 287, 289, 294-296
 プレゼンス……21, 98, 190, 198, 206, 210-211
 分断……20, 23-24, 44, 71, 74-78, 92, 101, 128-129, 131, 246, 258, 274, 299, 315-316
 ヘイトスピーチ……13, 15-16, 20, 27, 84, 269, 316, 321
 ホビ……22, 190-195, 198-199, 206, 209, 212
 本質主義……94, 96-97
- 【ま行】**
 マイクロアグレッション……83, 92
 マオリ……17, 22, 99, 215-234
 マルチユード……34
 メディア・オブジェクト……16, 20-21, 109-111, 122, 126-132
 もの語り……22, 190-196, 198-199, 203, 206, 211
 モンパ……21, 106, 111-113, 116, 118-120, 122-132, 136

【や行】

ヤマル半島……169-170, 175

【ら行】

ライブ配信……23, 66, 269, 271-275

ラテンアメリカ……52, 145, 156, 163, 316

リス ク ……9, 20, 83-84, 90-92, 95, 100-101, 193, 293

リモート……6, 25, 91, 98-100

ル カ イ ……22, 257, 259, 263, 265-266, 268, 270, 277

連帯……15, 20, 23-25, 39, 57, 59, 61, 66-69, 71, 74, 77-78, 263, 266, 276, 292

162, 170-171, 173, 183, 259, 268, 274,

276, 312

SNS……4-5, 8, 11, 16-18, 22-23, 40, 48,

57, 59, 62, 64, 69, 71, 73-74, 76-78,

91-92, 96, 98, 105, 115-117, 123, 125-

129, 131, 142, 169-170, 173, 175, 183,

257, 260-263, 265, 268-269, 271-272,

274-278, 296, 301

WhatsApp……8, 23, 300, 306, 310-313,

317-318

X(旧Twitter) ……5, 7, 12, 15-16, 58, 110

Zoom……6, 18, 60, 64, 216, 220-221, 223, 227-228, 230-231, 246

【わ行】

和人、和民族……84-90, 92-94, 100, 102

【アルファベット】

AI (人工知能) ……5, 11, 25 ASARO (オアハカ芸術革命家集会) ……38-39, 41-46, 48-49, 51, 53

Facebook……4-5, 8, 12, 15, 18, 23, 48, 53, 58, 60-63, 67-68, 71-72, 74-75, 77, 79, 108, 110, 115-116, 173, 184, 257-258, 260-261, 268-269, 271-275, 277, 300, 304, 306, 309-310, 312-313, 317-318

FRENAPI……300, 316-317

ICT (情報通信技術) ……4, 9, 257, 260-262, 277-278

Idle No More 運動……14, 79

Indigenization (先住民化) ……58, 210, 212

IoT (Internet of Things) ……4, 11

LINE……5, 8, 23, 110, 222-223, 226-231, 257, 260, 268, 275

NGO……21, 33, 147, 151-157, 159-160,

執筆者紹介

栗田梨津子（くりたりつこ）

第2章

平野智佳子（ひらのちかこ）

序章、第11章

国立民族学博物館・准教授

文化人類学、オーストラリア先住民研究

主な著作に、『酒狩りの民族誌——ポスト植民地状況を生きるアボリジニ』（御茶の水書房、2023年）、近藤祉秋・平野智佳子「先住民とデジタル化する社会——先住民研究の新しい枠組みに向けて」（『国立民族学博物館研究報告』48(1)、2023年）、「オンライン空間で先住民の声をきく——博物館展示の脱植民地化に向けて」（『文化人類学』89(1)、2024年）。

山越英嗣（やまこしひでつぐ）

第1章

都留文科大学 教養学部 比較文化学科・准教授

文化人類学、メキシコ地域研究

主な著作に、『21世紀のメキシコ革命——オアハカのストリートアーティストがつむぐ物語歌』（春風社、2020年）、「アートによる「生活空間の脱植民地化」をめざして——オアハカの民衆聖像崇拜とアクチュアリティの共鳴』（『国立民族学博物館研究報告』45(2)、2020年）、「文化的持続可能性への人類学からの応答——文化のゆるやかな共鳴を捉えるために」（原知章編『文化的持続可能性とは何か』ナカニシヤ出版、2023年）。

神奈川大学 外国語学部・准教授

文化人類学、オーストラリア研究

『多文化国家オーストラリアの都市先住民——アイデンティティの支配に対する交渉と抵抗』（明石書店、2018年）、『オーストラリア多文化社会論——移民・難民・先住民族との共生をめざして』（共編、法律文化社、2020年）、『新自由主義時代のオーストラリア多文化社会と市民意識——差異を超えた新たなつながりに向けて』（法律文化社、2024年）。

北原モコットウナシ（きたはらもこっとうなし）

第3章

北海道大学 アイヌ・先住民研究センター、文学院アイヌ・先住民学講座・教授

アイヌ民族の宗教、神話、ジェンダー

主な著作に、『アイヌの祭具——イナウの研究』（北海道大学出版会、2014年）、『ミンタラ① アイヌ民族27の昔話』（共著、北海道新聞社、2021年）、『アイヌもやもや——見えない化されている「わたしたち」と、そこにふれてはいけない気がしてしまう「わたしたち」の。』（田房永子漫画、303BOOKS、2023年）。

長岡慶（ながおか けい）

第4章

日本学術振興会・特別研究員（CPD・東京大学）、カリフォルニア大学 バークレー校 人類学研究科・客員研究員

医療人類学、環境人類学、南アジア地域研究
主な著作に、『病いと薬のコスモロジー——ヒマーラヤ東部タワンにおけるチベット医学、憑

依、妖術の民族誌』(春風社、2021年)、「歐米における青いケシのイメージとチベット医学——植物のイメージ人類学」(『立命館アジア・日本研究学術年報』4、2023年)、「アルナーチャル・ヒマーラヤにおけるシャクナゲと牧畜——異種間の連合としての移牧」(『アジア・アフリカ言語文化研究』別冊5、2025年)。

神崎隼人（かんざき はやと）

第5章

大阪大学附属図書館／人間科学研究科・助教

人類学、ラテンアメリカ地域研究、科学技術社会論

主な著作に、「問題は「環境」であるのか？——「それだけではない」ポリティカル・онтロジーのアプローチ」(『年報人間科学』41、2020年)、アルトゥーロ・エスコバル著『多元世界に向けたデザイン——ラディカルな相互依存性、自治と自律、そして複数の世界をつくること』(共訳、BNN、2024年)、「もし河床を掘り起したら——ペルー領アマゾニアの運河開発をめぐる環境アセスメントの政治存在論」(『文化人類学』89(4)、2025年)。

大石侑香（おおいしゆか）

第6章

神戸大学 大学院国際文化学研究科・准教授
社会人類学

主な著作に、『シベリア森林の民族誌——漁撈牧畜複合論』(昭和堂、2023年)、Fish Sharing between Humans and Reindeer in the Western Siberian Forest and the Mode of Herding. (Florian Stammer and Hiroki Takakura(eds.)
The Benefits of the Cold and Domestication: A

New Understanding of Human-Animal Partnerships for Thriving in Extreme Environments, Routledge、2025年)。

伊藤敦規（いとう あつのり）

第7章

国立民族学博物館・准教授

米国先住民研究・博物館人類学

主な著作に、『国立民族学博物館収蔵186点の「ホビ製」資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」3』(編著、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集3、2020年)、「民族誌資料の理想的なデジタルアーカイブと公開方法」(『文化人類学』89(1)、2024年)、『先住民との「協働」研究』(共編著、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、2025年)。

土井冬樹（どい ふゆき）

第8章

天理大学・講師

文化人類学、先住民研究

主な著作に、「カバハカは私たちの文化」——「所有」するようになることをめぐるマオリの実践と論理」(『神戸文化人類学研究』特別号、2022年)、「マオリと博物館のパートナーシップ——脱植民地化を目指すニュージーランドの先住民と博物館」(『文化人類学』89(1)、2024年)、「マオリ研究と脱植民地化——カウパパ・マオリと研究における文化的適切さ」(『ニュージーランド研究』30、2024年)。

渡辺浩平（わたなべ こうへい）

第9章

立教大学 アメリカ研究所・研究員

文化人類学

主な著作に、「「調和」する笑い——ナヴァホ指定居留地における相互行為の事例から」（『社会人類学年報』45、2019年）、「笑いはメディスンである——ペヨーテ・ミーティングにおける笑いと癒やし」（大坪玲子・谷憲一編『嗜好品から見える社会』春風社、2022年）、「あらゆるものとは「調和」できない——アメリカ先住民ナヴァホ保留地におけるもめごとの対処と風通しのいい他者」（山崎真之・坪野圭介編『学問から「いま」を見通す——ヴィーガニズムから生成AIまで』春風社、2025年）。

額田有美（ぬかだ ゆみ）

第12章

南山大学 外国語学部・講師

人類学、ラテンアメリカ地域研究

主な著作に、Interpreting Cultural Expert Testimony in an Indigenous Community in Costa Rica. (Rodriguez, Leila (ed.), *Culture as Judicial Evidence: Expert Testimony in Latin America*. University of Cincinnati Press、2021年)、El giro gastro-político en Costa Rica. (Zúñiga Bravo, Federico G., José A. Vázquez-Medina y F. Xavier Medina (eds.), *Patrimonio alimentario, turismo y políticas públicas: Etnografías entre lo local y lo global*, Secretaría de Cultura, INAH、2024年)。

尤驥（ゆう しょう）

第10章

大阪観光大学 観光学部・講師

文化人類学、台湾原住民研究

主な著作に、「現代社会におけるルカイ首長の権威と家族——近代化による変容ならびにKongadavaneの黒米祭に注目して」（『台湾原住民研究』24、2020年）、「台湾原住民族の文化復興と文化産業化をめぐる諸問題——ルカイ・クンガダワンの黒米祭の事例を通して」（『神戸文化人類学研究』6、2022年）、「今日の結婚式からみるルカイ頭目の役割と権威」（『台湾原住民研究』27、2023年）。

せんじゅうみん 先住民とデジタル化する世界

2025年11月21日 初版発行

編者 平野智佳子 ひらの・ちかこ

発行者 三浦衛

発行所 春風社 *Shumpusha Publishing Co.,Ltd.*

横浜市西区紅葉ヶ丘53 横浜市教育会館3階

〈電話〉045-261-3168 〈FAX〉045-261-3169

〈振替〉00200-1-37524

<http://www.shumpu.com> [✉ info@shumpu.com](mailto:info@shumpu.com)

出版コーディネート

カンナ社

表丁

コバヤシタケシ

印刷・製本

シナノ書籍印刷株式会社

乱丁・落丁本は送料小社負担でお取り替えいたします。

©Chikako Hirano. All Rights Reserved. Printed in Japan.

ISBN 978-4-86816-066-3 C0036 ¥3500E

